

浄土

第七月號

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可
（毎月一回一日發行）
昭和十九年六月廿日印刷本・昭和十九年七月一日發行

第十卷 第七號



安西覺承著

法然上人の和歌

B 6 版六十四頁 定價五十錢 送料六錢

上人の御作として確實な和歌二十首について一々懇切な語意、通釋、感想をのべた和歌註解の定本。上人の法の歌の中によく御遺徳の結晶をみる。

増谷文雄著

行誠上人

B 6 版二百三十頁 定價一圓五十錢 送料十八錢

近世不世出の高僧、謹嚴にしてしかも脱俗洒々たる上人の風格、言行がそのまゝ信仰の現れである。上人に傾倒する著者が渾身描き出した全傳成る。

發行所 法然上人鑽仰會

東京都芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番

林靈法著

法然上人を憶ふ

B 6 版四四〇頁 實費三圓 (送料共)

著者は思想上に懷疑懊惱を續け、遂に凡入報土に救はれた體驗を通し、告白と懺悔の内に法然上人の教義をつづつた。

(本會で取次ぎます)

○振替にてお拂込みの場合は何れも十錢増○

淨土 七月號 目次

表紙・卷頭カット……………月岡榮吉

村に教へらる……………生田花世(二三)

湛然和尚……………吉田絃二郎(一一)

活佛禮拜の信仰……………貴司山治(四)

時局 戰力增強の神話……………伊藤宏天(二〇)

ジャワの櫻……………佐藤春夫(八)

信仰相談……………(七)

會員通信……………(二五)

法語 一切を念佛の中に……………中村辨康(二六)

編輯後記……………(二八)

第十卷第七號

淨 土



榮

湛 念 和 尚

吉 田 絃 二 郎

湛然和尚は鍋島家の菩提所高傳寺第十一世の住持であり、傑僧であつた。「葉隠」には湛然和尚の話がしばしば出て来る。

初め三河國の某寺に在つたが、同國長圓寺の月舟和尚の推舉で高傳寺に入つた。或る時圓藏院の住持村了和尚が、寺格昇進のことで藩主に直訴した廉で、死罪仰せ付けられた。湛然和尚は村了和尚の命乞ひをしたが、終に聴き届けられなかつたので、慨然として寺を捨て十三ヶ年の間小庵にこもり、延寶八年入寂した。この湛然和尚が高傳寺に居られたころのことであらう。檜先に風鈴が懸けてあつた。

人が、その風鈴をながめて風流なことであると言つた時、湛然和尚は「いや、風鈴を懸けて置くは音を樂しむためではない。風を知つて、火の用心すべきためである。大寺を持つ氣遣ひは火の用心ばかりだ。」と答へた。風の強い夜など自身夜廻りをし、一生涯火鉢の火を消さず、枕もとに行燈附木など取揃へ「俄かの時うろたへて、火を早く點ける者はないものぢや」と人に語つて聞かせた。

月舟和尚、板倉周防守の菩提所三州長圓寺に住持のころのことである。周防守

に招かれて隠居のお伴をして御殿に伺候したことがあつた。周防守は唐筆の巻物を持ち出し「久しく持傳へてをりまするが讀めませぬ。お慰みに御覽になつてお讀み聞かせ下され」と、隠居の前に置いた。隠居は讀んで見たが、一向に讀み取れないので、月舟の前にやり「月舟讀んでごらん」と言つた。

月舟は一度見たゞけで、すつかり讀むことができたが、讀み兼ねた風情にもてなし、少し讀みかけては「この字は何と讀みませうか」と隠居に問ひ、また少し讀んでは「この字は斯うも讀みませうか」と隠居の意見をもとめて、辛うじて巻物一卷を讀み了はせた。

今の世には人を押し附けても、自分の才能を誇示する人が多い。月舟和尙のやうなゆかしいたしなみを見ては、かへつて卑しいとさへ評しかねない者がある。

或る工場に入つた挺進隊の娘たちは、その職場を飾るために毎朝美しい花を持つて行つた。ところが工場の或る課長は「花なんか飾るなんて怪しからぬことだ」といつて、悉く花を捨てさせてしまつた。

いつかビルマ國境に戦つてゐる皇軍勇士が、鐵兜に日本の山櫻に似た花をかざして、敵陣に飛び込んでゐる姿を見たことがあつた。簾の梅の昔語りのゆかしさを説くまでも

なく、日本の國民性には、元々、戦陣の間にもみやび、ゆかしさを忘れぬ美しい心やりがあつた筈だ。

わたくしの友人は自分達の事務室を飾るために、乏しい自分の懐で、花をもとめてゐた。

毎朝佛前に花を供へるところを、その工場、その事務室の同僚にさしげるといふことは洵にありがたいことである。一輪の花は千言の雄辯に優る。

このところは食糧増産のため空地といふ空地は開拓されて蔬菜を植ゑ付けられてあり、まことに結構なことであるが、たま／＼菜の花や隠元豆の花を見出だせば、一層救はれたやうな氣さへする。

數日前わたくしは多摩川のほとりを歩いてゐた。そしてゆくりなくも熟れはじめた麥の間に數株の罌粟を見出だした。わたくしはしばらく立ち留つて白い罌粟の花に見入つてゐた。

花はいつも天界の言葉をさしやいてゐる。

伊豆の友人は去年の春世を去つてしまつた。後には三人の男の子があつた。三人の子は召されて戦線に在る。

その友人がまだ若かつたころの話である。かれはシベリヤに行つて病院を建てた。三人の男の子はそこで生まれた。たま／＼妻の死、つゞいてケレンスキイ政府の倒壊、革命

の騒ぎに、身を以てシベリヤから脱出して日本へ歸つて來た。かれは小さい子を懷に抱き、二人の子の手を引いて雪の中を走つて、滿洲に落ちのびたことがあつた。

今や、かれは亡し。しかし三人の子等は成人して戦線に立つてゐる。亡友以て瞑すべきである。

けさ、伊豆の家を守る若い夫人からの消息を受け取つたわたくしのところにはシベリヤの雪の中を走る亡友の姿が映つて來た。そしてさらに欣然として國難に赴いた三人の姿が。

男はみんな戰場へ行く。國內に残る者一人として不自由などを口にしては相すまぬ。

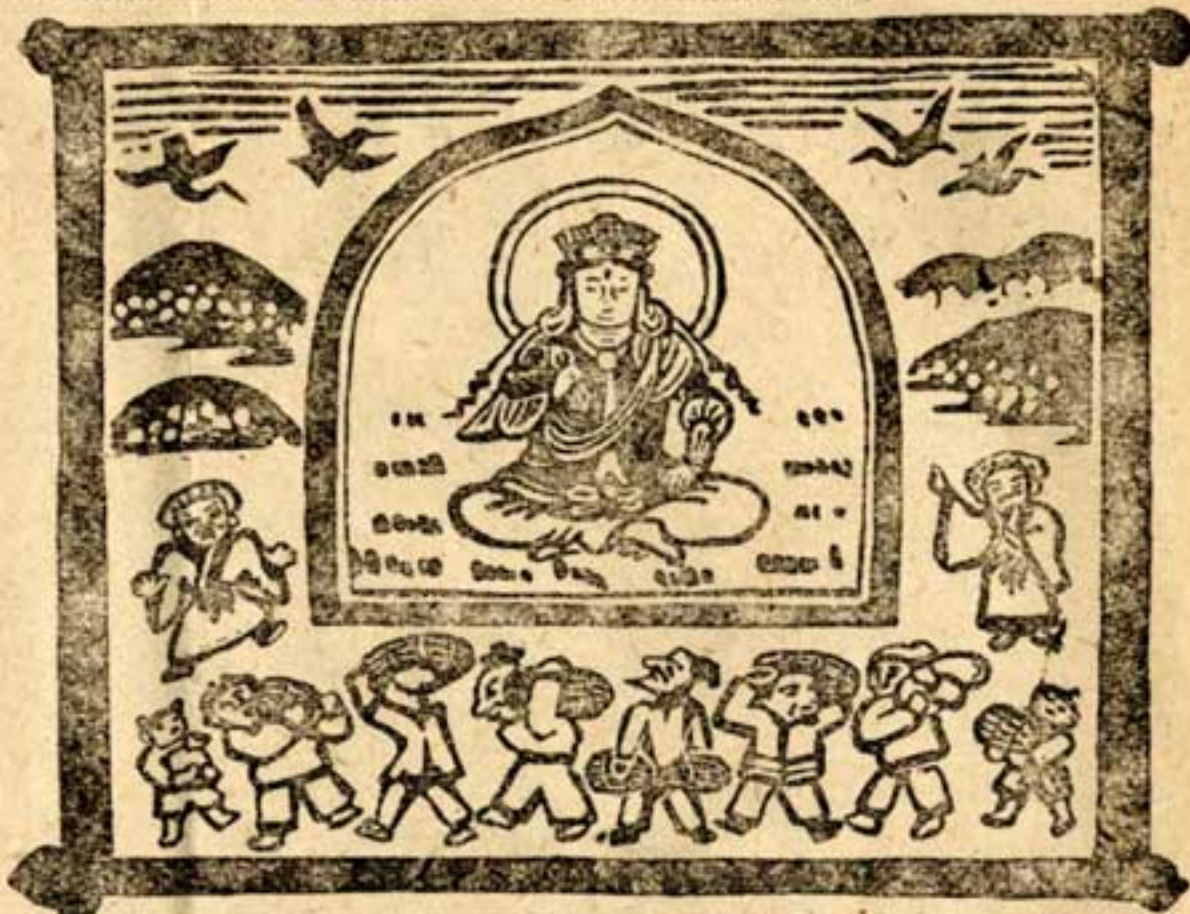
ロシアの現状を見ると十餘年前のインターナショナルなどとは凡そ縁遠い國家至上の思想に立ちかへつてゐる。當時ロシア人のインターナショナルといふ言葉を嚥呑みにして、數多有爲の青年たちの生涯を誤ませた日本の大學教授たちは今何を考へてゐるであらう。わたくしは二十年前、ロシア人ほど強く祖國愛を説く者はないことを指摘したことがあつた。トルストイの文學もドストイエフスキイの文學もツルゲネフの文學もチエホフの文學も愛國者の文學ではないか。かれ等は「わが祖國」と言ふ。

ロシア民族は恐るべき民族である。南溟に散華した古賀峯一元帥がアメリカを経て日本に歸

つて來た時わたくしに語つてゐたことがある。古賀元帥はアメリカの大都市（桑港？）を歩いてゐて、「本屋の少ないには驚いた。たゞ二軒だけ見つけたよ」と言つてゐた。

トルストイが死んだ時民衆のさわぎは大變なものであつた。遺骸を迎へる汽車の沿線は人で埋められた。ドストイエフスキイが死んだ時、數萬の民衆が式場に押しかけた。そして式場に入ることのできぬ女子たちの間にはドストイエフスキイ未亡人と名乗つて入場しようとしたものが六人もあつた。讀書をせぬアメリカ人に對して讀書好きなロシア人とを比べて見ると、いろいろなことが考へられる。

このころ面子といふ言葉がある。打倒といふ言葉がある。宗教する、哲學する、文學するといふ言葉がある、理念、戦ひ取る、といふ言葉がある。外國人が使ふのならともかく、日本人としては面白くない言葉である。社會的地位ある人々までが放送などでこのやうな言葉使ひをするのは感心しない。日本には同じ意味をあらはすに、もつとゆたかな、やさしい、ゆかしい言葉がいくらかもある筈である。外國の言葉を排斥する人々までが、こんな言葉を平氣で使つてゐる。強ひて外國語を使ふのも今日の狀態ではいかゞかと思ふが、尊い日本の言葉を忘れ、日本の言葉を輕んずるやうなことは戒むべきである。愛國者たちよ、もつと日本の言葉を尊べ。



活佛の禮拜の信仰

中) 寺マラの古蒙

治山司貴

私はさらに貝子廟から東の奥地へ、トラツクで一日行程の西ウチムチン王府にはいつた。ここはもう蒙古自治邦の東の端であつた。ここまできると、すっかり文明社會から隔離された純粹な、古風な蒙古人の生活をみる事ができる。

この王様は昔から大そう裕福であつた。それはこの地にダブス・ノール(鹽の湖)があつて、その鹽を採取して他へ賣る利益によ

つて富んでゐたのである。だから西ウチムチンの蒙古人はダブス・ノールを神の住處として尊敬し、毎年ノールから鹽を採る時にはおごそかな儀式を営む。ふだんは穢れを忌むといつて、婦人の近づくのを許さないほどである。

またこの王様は非常に慈悲心に富んだ人で、領内の貧しい者にその財産の大半を喜捨してしまひ、王府のすぐ隣りにウルデイトノムといふ立派な寺院を建てて、蒙古中のどこにもないくらゐ完備した藥堂をも設置した。藥堂はすなはち施藥所で、蒙古人は病氣の時、みな寺の藥堂からただで藥をもらつて行くのである。

かうした西ウチムチンの王府にはいつてみると、噂にたがはず人々は羊や牛や馬とともにいそいそと生活を楽しんでゐるやうにみう

けられ、その中に黄金色の屋根を光らせたウルヂイトノム寺院が建つてゐて、武陵桃源のやうな感じであつた。

私はこの王府の客となつて二週間あまりをここに滞在した。その間に、王府の隣りのラマ寺を訪問した。

その日、寺の門をはいると、大勢の役僧たちを左右にしたがへた活佛が、石段の上まで私を出迎へた。黄色い僧服に赤い袈裟をかけ、黒い蒙古轡をはいて七歳だといふ活佛が先きに立つて石段をおりてきた。とても愛くるしい、品のある子供である。すぐうしろから、今少し大きい十歳くらゐのラマがついておりてきた。その子も活佛に劣らず賢しげな表情をしてゐた。活佛の兄であつた。

私は幼い活佛の前にすすみでて、日本流にいいねいに禮をした。向ふでも日本流の最敬禮をした。長老のラマが私の方へすすみでて

「どうぞ客間の方へ……」

と、いつた。勿論蒙古語である。

幼い活佛は私を案内して先きへ歩いて行く。私はそのあとから活佛の客間にはいつた。客間といつても、そこは一方に佛壇の設けられてある細長い部屋であつた。佛壇は入



口に近い末座の方にあつて、上座の方には色ガラスをはめこんだ窓があるため、流れこむ外光が美しく彩られて壁畫や飾り棚や置時計や鏡などが光り輝くのだ。そのまん中に眞つ赤な蒲團を敷いた活佛の佛座があつた。幼い活佛は佛座に腰をかけた。私はすぐその横の客座にかけた。他のすべてのラマたちは末座の方の佛壇に近いあたりに集つてゐんな立つてゐる。かれらは活佛の前では、王

といへども坐することを許されない。私が活佛のすぐそばで椅子に腰をかけてゐるのなどは、いはば外國人に對する破格の待遇なのである。私の前には小さなテーブルがおかれ、お茶や干菓子のはこんでこられた。私は茶を飲み、氷砂糖を嚙りながら、
「活佛はどんな食べ物が好きでせうか？」
と、きいた。S君がそれを通譯しても、活佛はほんの少しばかり微笑しただけで何も答へない。兩手をきちんと膝にのせてゐる。
「知らない人にはきまりが悪くて口がきけないのです。何しろたつた七歳ですから。」
と、S君が代つて活佛の平生を私に説明した。——幼い活佛の第一の好物は何とキャラメルださうである。次ぎにはパイナップルが好きださうで。支那菓子や西洋ケーキはあまり好きではない。また運動が好きで、ゴムマリをついて遊ぶのが得意だとのこと。私は日本からこの活佛にゴムマリやキャラメルをおみやげに持つてこなかつたのを残念に思つた。
「貴司さん、王の叔父でも活佛の前では椅子にかけることをしない、それほど活佛には權威があるといふ證據を一つみせてあげませうか？」

と、いつて大男のS君は、末座の方へ立つて行つてそこにゐた王の叔父——五十歳くらいもの蒙古人——をいきなり抱へて、椅子にかけさせようとした。王の叔父はびつくりしてS君の腕をつきのけて逃げようとする。S君が引つづる。大男の君は柔道何段の達人だ。とてもかなはぬ。王の叔父が椅子にかけさせられさうになつたのをみた長老以下の、大ぜいのラマたちは、何とS君に捕へられてゐる王の叔父の腕や首をてんでに引つづつて大騒ぎの末、やつとこさS君から王の叔父を引きはなして、下座の方へつれてかへつた。
S君は今度は活佛の兄の少年をつかまへた。少年ラマは脱兎のやうに暴れて、血相をかへながら逃げのびた。その眞剣さといつたらない。
「どうです。たとへ兄でも、弟が一旦活佛となれば、絶対に臣従します。王様の叔父でもあのとほりです。」
私はなるほどとなつた。活佛は座から微笑してこれらの光景を眺めてゐた。
S君が息やすめに盆の中の氷砂糖をつまんで頬ばりながら、口をもぐもぐさせて活佛の方へ向き片眼をとちたりしておどけてみせた

「私がかうしてふざけて、あなたのやうな外國人の前で活佛がもしふきだしたら威厳を損ずることになつて大失策なのです。幼い活佛がどんなに頑張るかみて下さい。」

と、残酷にもS君は何度も氷砂糖を頬ばつて、ひよつとこ面をしてみせた。活佛は赤い顔になつて微笑するだけであつた。S君は氷砂糖を一つつまんで活佛の方へさしだした。「そつと口に入れてあげよう。もぐもぐしなければわかりやしないよ。」

活佛はかぶりをふつた。そして突然S君の方へ首をさしのばして、何かささやいた。S君はおどけた顔をして「ほーん」とうなづいた。そして私の方をみて、

「お客様があるから、ふざけると恥しい、といつてゐるのです。私と二人だけだと、子供らしい活潑な遊び方をいくらもするんですがね。何しろ遊びざかりの七つの子供を、まはりの者が活佛だからといつて、いつもかうしてきちんとさせておくやうに教育してゐるのです。だから活佛は大へんな忍耐力を持つてゐます。二時間でも三時間でもかうして佛座で姿勢を崩さずに頑張ることができます。幼い活佛には長上の活佛が師父となつて、

さうした教育をするのである。

活佛がいつもきちんとしてゐなければならぬ第一の理由は、毎日参拜者が寺へやつてきて直接活佛を禮拜する、その禮拜を受けなければならぬからである。

現に私が活佛の客間にゐる間に、一人の若い蒙古人がはいつてきた。藍色の蒙古服を着た青年は活佛の前まですすんでくると、そこに片膝をついて、腰の帯に吊してゐる嗅ぎ煙草入をはづして中から嗅ぎ煙草の容器を取りだした。それを両手にささげて、うやうやしく活佛の前にさしだし、頭をさげた。

七歳の活佛は小さなその片手をのばして青年の嗅ぎ煙草の容器にちよつとさはり、つづいて青年の頭をなでてやつた。青年は頭にさはつてもらつて深くお辭儀をすると、そのまま地べたを膝頭ですさつて、三尺くらゐ下座でもう一度いいいな禮をして歸つて行つた。かういふ風に活佛に頭をなでてもらふと、無病息災だといふ信仰が蒙古人の間に根を張つてゐるのである。そしてこの禮拜を参拜者が求めた時に、活佛の方でそれを拒むといふことはない。毎日活佛は参拜者の頭をなでる仕事で忙しい。頭をなでてもらつた信者は、

何がしの喜捨をしてかへつて行く。これが寺の収入となる。

蒙古の各地にはたくさんなラマ寺がある。しかし活佛のある寺とゐない寺がある。ある寺をゲゲン・スム(ゲゲンは活佛、スムは寺)といひ、西ウヂムスン王府のウルヂイトノム・スムはすなはちゲゲン・スムの一つである。ラマ教の信仰では佛は現身で、且つ不滅である。活佛とは釋迦如來が現世にその不滅性を以てあらはれてきた現身であるとの意味で、すなはち寺の本尊である。私のはいつた幼い活佛の客間に佛壇が末座の方にあつて、ひどく粗末に扱はれてゐるのは、日本の寺院とちがひ、偶像はここでは本尊ではないからである。

そして、ウルヂイトノム寺院の活佛はわづかに七歳であるが、この活佛が次第に齡を取つて遷化する時、次ぎにはどの方角のどこの村に生れかはつてくる——と、遺言する(活佛は必ずこの遺言をしなければならぬ)遷化ののち、役僧たちは遺言の方角に生れかはつてくるはずの活佛をさがしに行く。草原の中の蒙古人の包を一つ一つさがし歩いて、容貌のすぐれたかはいいい幼児が生れてゐる家を

信仰相談 中村辨康

懺悔しても

(問)

私は母親の感化からか、何かシクジ
リをしますと、すぐ「我昔所造」の

文句を唱へて懺悔して胸の痛くなるのを緩和
させて居りますが、年と共に懺悔の氣持が多
くなりますし、また懺悔しながらそのあとか
らあとからと煩惱忘念が起つて来るのがハッ
キリして來ますので、もう懺悔文だけでは氣
が済まなくなりました。一體かゝる者に取つ
ては何うすればよろしいでせうか。お教へ下
さい。(三重縣・一志郡・前川常徹)

(答)

懺悔文は御覽の通り一般的なもの
でありますと共に、儀式の中の一
部分として殆んど習慣的に讀み訓らされて居
りますので、あれだけではシクリ心が落ち
つきかねます。あの文だけでは餘程宗教感情
が豊富でないと、心からなる懺悔が出來難い
やうです。然るに貴君のは懺悔の心が起つて
からあの文句をお唱へになるとのことですか
ら、その趣きは他の人よりもまた格別のもの
があらうと存じます。

お賀ねの「我昔所造」の懺悔文だけでは最

早氣がすまなくなつたことに對しては満腔の
敬意を表する次第ですが、それには廣懺悔を
お讀みになつては如何ですか。あれは随分委
しく私達の心のいたらなさを表現して居りま
すから「發露懺悔」の文としては非常によろ
しいやうに思ひます。

然しながらもつと一層適切にと思はれるな
らば「念佛」が一番よろしいと思ひます。懺
悔文などはむしろ持つてまはつたものであり
まして、それよりも南無阿彌陀佛の方がその
中に一切を籠められてあつて、悲しい時でも、
くやしい時でも、嬉しい時でも、悔まれる時
でも、人目は兎に角心ひそかに合掌低頭瞑目
して「南無阿彌陀佛々々々」と一心に唱へる
ことに依り、自然に心が開けて參ります。人
の心は煩惱の雲にとざされて居て、明暮懺悔
しなければならぬやうなことがかりして居
ります。それ故古人も「隨犯隨懺」と云つて
常に念佛されたのですし「念時日の三懺悔」
と云ふこともあつて、上品の人は念々に念佛
しつゝ懺悔したのであります。又敷上人と言
ふ人は「またかゝ」と言つては念佛懺悔を
したと傳へられて居ります。御參考にならば
幸甚です。

みつけると、役僧や王の使者たちは靈感で、
「これが活佛の生れかはりだ。」ときめて、無
理矢理その幼兒を寺へつれてかへる。すなは
ち年老いて遷化した活佛は、新たな幼兒とな
つて寺にかへつてきたのである。

これは何となくキリスト生誕の物語に似て
ある話だが、かうして寺にはいつた幼い活佛
は、もう滅多に親に會ふことも、兄弟に親し
むことも許されない。役僧たちに教育される
だけでなく、今いふとほり他の寺の長上の活
佛が師父となつてきびしい教育をする。そし
て私の會つたウルヂイトノム寺院の活佛のや
うに、七歳にして品格のとのつた、行儀作
法の正しい、忍耐力ある生ける阿彌陀如來と
かはるのである。

*

私はおよそ三十分くらゐ、この幼い活佛の
客間に坐つてゐた。その印象は日本へかへつ
てからもあざやかに臉にのこつた。ふと眼を
とちると、ギリシヤ彫塑のやうな美しい活
佛の貌がすぐ浮んでくる。今も大草原の寺院
の中に、あの幼い阿彌陀如來は、すこやかで
あるだらうか、と心にかかる……。〔寫眞は
活佛(前)とその兄(少年ラマ)〕

ジャワの櫻

佐藤 春夫

一月の十日ごろ、バリから歸つた翌日の朝、スラバヤの友人は車を命じて自分をトリテスに誘うて來れた。體質に合はなくて、どうしても冷水の浴の出來ない自分のために一度、湯浴をさせて、バリの塵を洗はせようといふ親切からであつた。

我々のクラブ見たいなところですからわたしを紹介すれば入れます。行つて見ませう。トリテスと云ふ所にあります。といふ。

トリテスはスラバヤから六七十里ばかりの地で、マラン街道をほんの二十分かそこら驅つてから、右に折れてまた二十分ばかり、小高い丘のうへにあつてオランダ人がスラバヤの暑を避けてここに住宅地を營んでゐたものである。地勢は武蔵野や相模野の丘陵に似てゐるうへに、オランダ人はギリシヤの圓柱の趣ある德利椰子を自ら植ゑる外は椰子の木は野蠻としてこれを彼等の目にふれるところに

植ゑるのを許さなかつたからオランダの住宅地域たるこのあたりには椰子の林が見あたらない。椰子に代るものが竹林であるために風景は一層日本に似て自分はそぞろにわが田園の憂鬱の地を思ひ出した。

この中流の住宅地のなかで、特に別荘らしい瀟洒な構への多い上の方の土地の一番奥が我々の目的の場所であつた。以前はホテルか何かであつたらしい。門を入らうとして車をすてたあたりに向ふの丘の上から海らしいものがのぞき出てゐたから通りかかつた里人に聞いてもらつたら、やはりジャワ海の一部で東方に當るといふ。更に聞いてここからは海上の日の出が見られる事をも確めて置いた。

正午に近い時間になつてゐたので、先づひる飯を攝つて、さてゆるゆると入浴をすまして出たら、友人は庭に面した一室でひとり讀書してゐたが、自分の顔を見るとジョゴスにコーヒを命じてくれた。

櫻のワヤジ

冷いコーヒを飲みながら、友は庭前の一樹を指して、

あれが櫻ですよ、ね、あの葉をごらんなさい。無暗と大きくはなつてゐますが櫻に相違ないのです。

近よつて見て來ましたがまがふ方なく櫻でした。さくらん坊が見えたから花も咲いたに違ひありません。やつとさがし出して咲いてゐるのを見つけたから、通りかかつたジヨゴスに命じて採らせました。

と話しながらどこからか一輪のほんの一輪の花を取り出した。一重で普通よりは少し色も淡く形も大きいのが吉野に相違ない。

誰が植ゑたのでせう。

ジヨゴスは前からあるのだから知らないと言ひます。さうでせう、木を見ても大ぶん太くなつてゐます。オランダ人がものすきに鑑賞用に植ゑたのでせう。後年日本人の感傷用にと思つて植ゑて置いたのではありますまい。

と云はれて自分はこれを押し花にして土産にしてやらうといふ考へをすてた。日本人の感傷用といふ語に氣がさしたからであらう。

歸途にはある庭の崖のうへにあぢさゐの今をさか

りと咲きみだれてゐるのが目についた。

自分は四月の二十七日に歸京して故郷の櫻は八重より見なかつたが、今年の一月十日ごろにもう花は見えて來てゐたのであつた。大ぶん早手まわしであつた。

歸つて庭の木々の枯枝を焚木にさせたり防空壕の土のくづれたのを直させたりしようと植木屋を呼んだ時ジャワの櫻の話をする、以前仲間の者がジャワからの注文で櫻の苗木を四千本送るといふのを手つたひした事があつたが、人手が足りない時で荷作りの機を失して大ぶん枯れたのが出てゐたから、どれぐらゐうまく向ふへ行つて育つたやら知りませんが送り出したおぼえはあります。さうですね。震災の少し以前の事でしたらうか。と言つてゐた。植木屋の話はトリテスの櫻の木の大ささ古さに思ひ當るものであつた。

アメリカでは日本の櫻をみな切つてしまつたとか。勝手にしやがれた。やけをおこして損をするのは手前たちだけだ。こちとら何もいたみはしないや。

と植木屋は一笑してきせるを吸ひおさめた。



時局 戦力増強の神話

伊 藤 宏 天

の人々には全く皆が驚かされ、偉大な感化を全炭山が受けました」といふ話が出た。

『最も骨の折れる、最も危い、最も人のいやがる所へ』

「先ず其の方々は、仕事場の割當に際し、一番骨の折れる一番危険性の多い、一番人のいやがる所へやつて下さいと所望しました。然し、其れだけなら、『もの好きなやつもあるものだナ』位にしか思はれ無かつたでせうが、さて仕事も終り、夕食もすました後では食堂へ集り、大きな聲でおつとめをし、果ては、其の教獨特の讃歌を上げて踊躍する。皆が珍らしいので見に寄つて来る。これだけなら、或は、見世ものに過ぎなかつたかも知れませんが、さて休日になると、

是れで〇〇日をぶつ通したのです。

『信仰の深い人は違ふ』

これが全山を動かした唯一の據點でした。

何事も信念的にを振り出しにして、斯うした事例を胸に納めて、激勵講演の壇に立つ私であつたが、これは某市に於ける會場でのこと、設備萬端、行き届き過ぎた位の良い會場であつたのに、何うした間違ひか、集つたお客は大人二人に子供が三十人、而も、映畫を見に來たので講演は無用と云ひたげな態度である。立札看板と宣傳とは、戦力増強激勵云々である。さあ何うしたものか。お得意の信念的も一寸顔負けの態である。然し、ここで信念的を捨てたら、私は自殺も同様である。負ける事はきらいだ。自殺は禁物である。私は勇を鼓して登壇した。佳い教材が見つかった。日本神話である。

國民總躍起運動の始まる前のこと、滋賀縣商業報國隊で、『戦力増強激勵講演と映畫の夕』を各所で催した。本部からの指令で私が講演を引き受け、探炭勤勞奉仕隊への感謝と激勵を試みた。

そしてその慰勞歡迎會での席上、土産話にはなが咲き、

「いつも『宗教家の方々でさへ』と良い方の例に挙げられて面目を施しました。しかし〇〇教

私達は折角お手傳ひに参つたのです。まるまる働いたとて〇〇日です。たかが知れて居ります。日曜も休日もあるものですか。さあ、今日も出させて下さい」

と、先に立ちます。そして例に依り、

「天つ神の、諸の命もちて、いだし給へる伊非諸尊に伊非冊尊、略して諸冊二尊と云ふが男女御夫婦の神さまである。女神伊非冊尊は、山を産み川を産み、岩石草木一切物を産んだが最後に火を産んだ。(火を知ることは人文の根柢、火知りは聖である。自然現象より人文への展開、神話の寓意は面白いが、今は暫らく略して置く) そのため、大火傷をしてみまかつた。よみの國へ旅立たれたのである。日の經つに従つて、残つた伊非諸尊は戀しくなつたものか、よみの國へ會ひに行かれたらしい。所が、仲々面會されぬ。聲は聞えるが姿は見せられ無い。

「這入つても好いかい」
「いけません。女には女のたしなみが御座います。用意が出来たら申上げますから、其れまでお待ち下さい」

しかし待つのがじれつたので、
「もういいかい」と又しても催促

「未だです」

まるで子供のかくれんぼのやうだ。遂に伊非諸尊が待ちくたびれてソツと中を覗いて見られたら、サア大へん、火傷のあとが腐つてたゞれて、膿が流れて蟲がわいて、蠅がたかつて蛇が

飛んで、二目と見られぬ傷ましさを、寧ろ、恐ろしくなつて、
「此れは何うだ」
とばかり、思はずも聲を上げて顔をそむけたものだから、女神は承知せぬ。



「だから見るなと申したものを、約束を破つて男らしくも無い。女に恥をかかして」

と、怒つたものだから更にいけない。其の顔の醜くさ恐ろしさ。誰でも、怒つた顔は醜くものらしい。文章にはよもつ醜女と書いてあ

る。

其れから後の葛藤に私は偉大な寓意を見出したのである。即ち伊非諸尊は逃げる、醜女が追つて来る。其れを拂ふために第一に投げたのが側にあつた桃の實だと云ふ。多少は防げたやうだが矢張り追つて来る。今度は、みづらに差した櫛の齒を一枚折つて投げつけた。バラ／＼と擴がつて櫛となつた。今日の鐵條網にでも比す可きか。これで大丈夫と思ひきや、振り返つて見ると、も早や背後に追ひ迫つて居る。敵の反攻急迫はまことに侮り難いものがある。諸尊は遂に最後の策として「千引の磐」を道に据えられた。いかな醜女も此の磐だけは越せなかつた。磐の向ふでジダンダ踏むでくやしがつた。そしてくやしきぎれに

「其んな意地の悪いことをなさると、此れから毎日、あなたの産む子を千人宛食ひ殺してやるぞ」

と呪ひをかけた。すると諸尊はせゝら笑ひ

「お前が千人宛食ひ殺すなら、こちらでは千五百人宛産むばかりサ……」

と、餘裕綽々、應揚に答えられたので、醜女の呪ひは打ち消されたばかりで無く、其の呪ひのために身を攻めて、結局は手も足も出なくな

つて磐の向ふで立ちすくんで仕舞つたと云ふのである。

諸尊は意氣揚々と引き上げ、よもつ平坂でみそぎを取り、顔を洗つて（面目一新と云ふところ、萬事の切り替へである）左の目から左の手を離したら天照大神が生れられた。右の目から右の手を離したら月讀命が生れられた。鼻をかまれたら素戔鳴命が飛び出した。

私は演壇上で、嘗つて讀むだことのある此の神話のいくさりを思ひ出すままに語りつづけた。

決戦苛烈と皆が云ふ。皇國隆替の岐路に立つと顧まされてゐる。茲にも戦力増強の聲がかつてゐる。何うしたら良いのか。

吾等の先祖は偉い。

「斯うせよ」

とばかりに前述の神話を残して呉れてゐる。

祖先は今日の國難あるを見通して居たのか。或

は然らん。されど、私は思ふ。今日あるを見通

したと云ふよりも、肇國以來幾千萬年、吾等の

祖先は、「斯うして來た」との生きた教示が、こ

の神話では有るまいか。私達のこの身には祖先

の其うした血が流れてゐる。私達の踏むこの土

は、其うした努力で護り抜かれた實蹟の結晶で

は有るまいか。否、確かに「其うだ」と私は信ずる。

神話に見る「よもつ醜女」を此の際は、鬼畜米英に見ても差し支へあるまい。

第一に、桃の實を取つて投げつけたことは食飼の整理である。随分永い間、吾人は食に關して無駄と贅澤とを續けて來たことに氣づかされる。宴會も遊樂も高等飲食も、總ては米英の謀略に基く無駄であつた。此れを整備する事に依つて莫大な餘剩餘力が産み出される。ここにも立派な防衛力がある。

第二に、櫛の齒を一枚投げつけたことは、身の廻り諸調度、日用雜貨、化粧小間もの、衣類に至るまで、衣食住と云はるる程に、生活必需品とは見られるものの、其所にも随分な無駄と贅澤とが繰り返されてゐた筈だ。此れもお前に返上と、投げ出して見ると、廣大な戦力が産み出される。

佛教は元より頭陀生活、三衣一鉢の簡素に眞生を完うせんとしたもの、ここにも大きな意義がある。されど、

第三に、越すに越されぬ千引磐とは、磐石でありイシである。一億敢闘の意志、撃ちて止まむ、彌が上にも昂揚された國民の戦意である。

斷じて行へば鬼神も此れを避く。更には必勝の信決定。往生は一定と思へば一定、不定と思へば不定……。磐石の固き決意こそ、醜女の能う越さ無かつたのも道理である。くやしまぎれに物量の反攻、千人宛食ひ殺すとの呪ひに對しては

「千五百人宛産むでやるぞ」
造機、造船、物には物を以て答へるばかり。内には磐石の固き戦意あり、外には兵器軍需の増産あり、醜女の立ちすくむだのは理の當然である。伊非諸尊はよもつ平坂で襖を取り顔を洗はれたと云ふ。面目一新、左右の兩眼より二神の出現となる。

神話は何所までも趣きが深い。目のつけ方、着眼點、一切の切り替へ、出直しの要諦はここにあり。

腰さへ定まれば何ぞ恐れん、必勝われに在り。されど用心にしくは無し。一丈の堀を越えんと思へば一丈五尺の思ひをなす可し。ここに激勵講演の要がある。而も、切り替への歩調が一日も早う揃ふやうにと念じつつ、辛うじて講を終へ降壇することが出來た。聴衆は子供ながら、可なり意の在るところを汲み取つて呉れたらしい。



村に教へらる

生田 花世

時局柄、工員の出勤のお邪魔をしてはいけな
いと自肅して、朝は交通機関をつかはない事に
私もしてゐた。然しその日、五月四日には埼玉
縣兒玉郡の松久村へ行くのであつたから午前五
時すぎに家を出て、池袋經由、一番の寄居行に
と乗つた。こんな時刻に、この東上線へ乗るこ
とはこれが初めてであつた。

乗客は右も左も工員である。若い女の人も七
八人一隊乗り込んでゐる。何れも十八九歳の若
さで、健康な血色が美しく匂つてゐる。工服は
薄茶色のもので、腕には、かなり目立つ赤のま
るい表識章がかざりつけられてゐる。中の一人
はその表識章以外に、色の鮮明な櫻花の章をも
加へてゐる。班長格と見られた。この婦人達
が、どんな仕事に従事して、軍備に役立つてゐ
るか知るべくもなかつたが、戦力の増強に孜々
としてつくして下さる事を、感謝しながら共に

車體の動揺を身に受ける喜びが私の胸にたゞへ
られてゐた。どこまで行つて、この人々に別れ
るであらうとおもつてゐるうちに、一つの驛、
又一つの驛と進むにつれて、工服の数を増し、
やがて〇〇にて、一同下車した。

この停車は少しく長く、やがて輕くなつた
車體は疾走して川越に近づいて行く。〇〇〇の
驛にては、埼玉縣方面からの工員が二百名ほど
二車にびつたりとつまつてゐたのが、下車し
た。數列となつて肅々と丘をこえて、大きい建
物に近づいてゆく。この光景は、けだし壯觀で
あつた。

私たちが、東京で、毎日の連續の、自分のた
めの炊事などしてゐる時、少しはなれたところ
ではかういふ時代の壯觀が若人によりくりひろ
げられてゐるのであつた。見るといふ事はいた
く心を刺戟する。私は心の薄皮を一枚めくられ

たやうな氣がした。

『こんなにして、元氣な人々が働いてくれてゐ
るのだ。忝ない。一つ、私も更に勇氣を出し
て、自分相應の事を努力しませう』

と心に誓つた。

川越もすぎて、玉淀、寄居に近づいて行く
と、もはやそこらは山地である。鉢形城の城跡
の山が望見される。千年の昔、こゝらは、大莊
園の主と、武家との合戦の土地であつた。又そ
の百年、二百年前には、京都から來た國司を中
心にして、上代文化の華咲いた土地であつた。
松山附近は、支那からの歸化の人々又朝鮮から
の亡命の人々が、汗を流して開墾した田畑が連
なつてゐる。

鎌倉街道と稱せられる道は、今日荒廢し、
又、新道により中斷されてゐるが、一見し
て、こゝら一帯での上代交通の跡が察せられる
のである。古くは日本武尊の御東征の事もあ
り、坂上田村麿、又、源の八幡太郎義家の奥
州征伐の事もあり、史蹟は處々にあり、大小の
貴人の園墳は發掘しては崇りがあるといふ云ひ
傳へのもとに猶保たれてゐる。

東夷征伐、九州征伐、これらののちに、國內
にての幾度かの、統合するがための争剋をへて

（その間に承久の亂、戰國時代、上野の戰爭などあり）今は一團の日の丸となつた日本及び日本人は一致協力して、外敵にあたつてゐるのだ。私は畑の中の古墳の下に眠る古人にもの申したかつた。

『御覽なさい。あなたの方の子孫の活動を』

『お護りになつて下さるやうに。あなたの子孫の武運長久を。工員の工運長久を』

上古の莊園時代の古墳と、今日の大東亞戰爭中の麥畑とが一つの繪となつて、新緑風景を形作つてゐる視野はいつまで見入つても飽きないものであつた。

○

私には玉淀、寄居附近の風景が必々親しまれて来る。南部丹澤山塊につづく、甲信國境の山塊が、西方に天そり立つが、その麓地帯の相當廣い面積を小山が群立してゐる。山又山といへば、人は深山を頭に描くであらう。しかし、玉淀、寄居から、松久、兒玉にかけては、この山又山が小山なので、ちつとも暗くない。而して、これら小山は何れも、この土地の人々の薪の山である。燃料生産のところである。重寶で、しかも美しい。

その山の一つには舍人山といふ名がある。

そこらに、京都へ行つた多くの舍人の中でも特に功勞のあつた舍人の邸宅であつたといふのである。

古の農人生活を味はしめて、微笑されるのは曝井のあとである。そこには十年前に有志の人によつて立てられた歌碑がある。萬葉の歌が楷書にて刻されてゐる。

三栗の那賀に廻れる曝井の
絶えず通はんそこに妻もかな

といふのである。

「東歌」の中の一つであるこの歌は當時の若い農人の憧憬を土くさくのべてゐて面白い。

曝井の清水は清冽である。傍の里川の水は炎夏の時絶える事がある。しかし曝井の水はどこからともなく湧いて出て、五代より今日まで溢れつづいてゐるのだといふ。悠久な話である。

この曝井を上から見下すべく新しい石橋がしつらはれてあるが、これはどうしても木の橋でなくてはうちこわしですと同行の人がいふのを私も肯定した。

井に近く農家四五軒がのどかに家づくりしてゐる。これらの家は何れもこの曝井の水を飲料水としてゐるのだといふ。

こゝから、今度の戦争に参加して、もう

戦死したのもあり、なほ北支、中支、南支、南方にゐるのもあつて、家は女人と老人とにより護られてゐるのもあらうと思はれた。

有難いことには多くの山又山を廻つたり、越えたりしてゆく前後左右にひらく田畑がすべて耕作され、麥や野菜類が繁つてゐる。増産奨励の埼玉縣の奮闘は、かうしたところでも、立派な形となつてゐるのであつた。

○

松久村へ何故人をたづねて行つたかといふと、この頃、東京をはじめ大都市の生活をしてゐるものの頭にふりかかつてゐる疎開といふ事からであつた。

私も東京でなくてはならぬ公職がやめられた頃には、いつまでも牛込にゐないで、疎開したいとおもつてゐるものだ。それには、東上線沿線へとかねがねおもつてゐたところ、はからず兒玉村の知人のところにて、松久村の青年を知り、一度村へいらつしやいませんかと聲かけられたのを幸ひとし、實地見聞に動いた次第である。

○

この青年は酒井眞右といふ人で、かつて、ノモンハン方面、又、北滿杏樹などにて航空軍備についた方であつた。功勞ある人の村居を訪ね

る事はたのしかつた。防空服装をして、松久驛に降りたつた私を、兒玉村から来た關口といふ舊知が迎へてくれて、桑畑の中の道を行く事し、酒井氏が自轉車にて来るのに出逢つた。前にもものべたやうな曝井の悠久の水を賞し、案内されるまゝ深く入つて行くと、葉櫻のなかに卯の花白く、山吹の花もこゝかしこの垣根を綴り、鶯の聲がどこからともなく聞えて來

て、まことにうれしい山間の初夏、私はそゝろに四國の郷里に歸つた思ひがした。酒井氏のお家は古くからの大きい農家であつた。お庭に立つと、前方の小山が青い草木と沃土だけを盛つて、おいしさうに供へてくれる。牛が居り、犬が居り、鶏が居り、農家の持つすべてのものが整然と處を得てゐる。かういふ環境は身に快いばかりでなく、音樂のやうに心をも爽快にくれる。酒井氏の母上はおやさしい御婦人であつた。しかも今日の銃後を黙々として支へ抜く働き手であつた。遠來の客のためにいろいろのお心づくしをして下さつた。

會員通信

自爆した甥の遺志をいかして

昨年四月某日南支桂林で、二十三歳の若櫻の身で自爆し果てた甥の文生が、少年飛行兵となつてから、他の雜誌はいらぬから淨土だけはと云つて一ヶ月でも送る事を忘れてゐると催促してきました。自爆して後に届いた端書にも吉田絃二郎先生の事ども有難いことだと書いてあり、思はず涙を催したものでした。

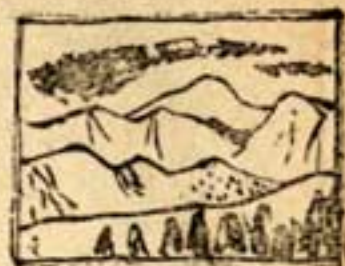
小生としても淨土を拜見する度

に自分の愚なる事が省られ、學生の時麻布道源寺に二ヶ年餘も下宿してゐた身でありながら、この年になるまで心に念佛を奉じつゝ、口に唱へ得ざりしに、淨土のおかげで何時しか聲も高らかに念佛を申せるやうになつた自分に氣付いて、今更に有難く吉田絃二郎、中村辨康、佐藤賢順諸先生に厚く厚く御禮申し上げます。別便にて金二十圓御送附申し上げますから、五ヶ年分の會費を差引きその他を會資金の方へ御處置願ひ上げます。齊々哈爾市南門外頭道街二號 米津百松

うに心をも爽快にくれる。酒井氏の母上はおやさしい御婦人であつた。しかも今日の銃後を黙々として支へ抜く働き手であつた。遠來の客のためにいろいろのお心づくしをして下さつた。二時間位酒井氏の書齋でお話をしてから、歸路についた。來た時とはちがふ道、山坂道を案内されたが、そこにもこゝにも董の花が咲いてゐて、杉菜の叢が柔かい。左右の

小畑は何れも酒井氏の御所有のもので、何れにも麥や、馬鈴薯が植ゑられてゐる。一度凹地に降り、又凸處に登つた時に、行手に一つの寺院がこんもりとした森の中から頭と胴を出してゐる。明るい山寺である。油然として、私の心に湧き起つたのは、私もこゝらに寺づくりしたいと考へた事であつた。思ひもかけない想念ではあつた。この二三年來、近くの町の〇〇寺で月一回づつの法話をきく。寺を、この世の遁世處に考へる私ではなかつた。只今、國策として唱導される疎開所としてである。

『私がこゝらに草庵を結んだなら、關口さん、あなた第一に檀家になつて下さいねえ』かう私は云つて見たかつた。そして言つたら關口さんは、『なりますとも』と笑つた。かくして私の夢想は、埼玉縣の松久村に、一つの草庵を結び、いつも心をそこへ持つて行く事となつた。しかも現身は、空襲必死の帝都にて、公職のつゞく限りはふみ止まつて働くのである。私も亦公員の一人であり、松久村の酒井氏の母堂が、裸足にて田畑に立つ時を考へ、はげまされて一日の勞務に従ふ。ただ一人の力なりとも築きゆく大東亞の礎となる。



一切を念佛の中に

法然上人法語解説(其三二)

中村 辨 康

法語

現世のすぐべきやうは念佛の申されんやうに過ぐべし。念佛のさまたげとなりぬべくば何なりとも萬を厭ひ捨て、之を止むべし。曰く、聖りて申されずば女をもらけて申すべし。妻をもらけて申されずば聖にて申すべし。住所にて申されずば流行して申すべし、流行して申されずば家に居て申すべし。自力の衣食にて申されずば他人に助けられ申すべし。他人に助けられて申すべし。一人して申されずば同朋と共に申すべし。共行して申されずば一人籠り居て申すべし。

衣食住の三は念佛の助業なり。これすなはち念佛往生を遂げん爲には何事もみな念佛の助業なり。三途へ歸るべきことをする身をだにも捨てがたければ願み育くむぞかし。況して往生ほどの大事をはげみて念佛申さん身をば如何にもくはぐみ助けべし。もし念佛の助業と思はずして身を貪求するは三惡道の業となる。極樂往生の念佛申さんが

爲に自身を貪求するは往生の助業となるなり。萬事かくの如し。(諸人勸化の御詞。念佛問答集。(法語抄一六七—八))

解説

活、念佛は念佛と全然切り離されて居るの念佛は單なる形式ではありません。即ち聲に出すところの「南無阿彌陀佛」と云ふ言葉だけではありません。つまりそれは如來の本願を信する信念が聲に出たところの一表

現に過ぎないからであります。ですから信仰と云ふものは單に聲に出るばかりでなく一舉手一投足にも自然に念佛の氣持が現はれなければならぬものと思ひます。

もし聲に出すのみが信仰の現れで、その他のことはさうでないといふならば、それはまだ不徹底たるをまぬかれません。信仰は信念が基礎になつて外形にあらはれるものであつて、外形のみが單獨にあり得る筈がないと思ひます。言ひ換へますと信仰を有する限りその生活は念佛生活でな

ければならぬものと思ひます。

然かも念佛の信仰は人間である限り誰でもが持たねばならぬものであります。念佛と云ふ形にとらはれて居る人は、そんなことは「我田引水だ」と言はれるかも知れませんが「阿彌陀」とは「永遠の命」であり「無限の覺醒」であり、その完全な姿を「佛」と云ふのでありますから、それを念じそれに信順しそれに歸命することは、畢竟人間の最高理想に信順し歸命することに外ならないからであります。ですから人間生活そのものの正しい姿が念佛生活であるべきだと考へます。

此の意味からこの御法語を拜讀いたします時、文字に現はれた意味が素直に受取られるのであります。即ち念佛のさまたげになることならばすべてそれを拂ひのけなければなりません。同じことでも甲の人に取つては障害とならぬものが、乙の人にはさはりとなると云ふ場合が常にあります。せうから、その場合に於ける障りとなるものを止めよと云ふのであります。

然かも一切は念佛の助けとなり得るものであります。これを「異類の助業」と善導大師は言つて居られます。衣食住の如きは宗教の行の中に加へることは出来ないが、衣食住なくして信仰もあり得ないから、これを「異類の助業」として信仰を助ける「しわざ」と名づけるわけであります。

法然上人になりますとこの善導大師のお考へよりも尙ほ一層純一化して居て、生活と信仰とが一元になつて居ります。この御法語では一應「助業」と言つて居られますが、人間生活の中で最も中樞と稱すべき「仕事」を「念佛の中の仕事」として

「たとひ餘事を營むとも念佛を申し／＼これをすると思ひなせ。餘事をしゝ念佛すとは思ふべからず」と言つて餘事ではなく念佛中の仕事として居られますし、

また「五種正行」に就いても「稱名正行」を以て「正定業」とし他の四正行を「助業」とする「助正分別」は一應の義であつて正しくは「廢立」の爲に五種を擧げたものと

斷定して居られます。廢立とは「稱名正行」を立てんが爲に一應五種正行を擧げたのであつて「稱名正行」たる信行が確立すれば最早それ以外の四種の行は廢すべきであると云ふのであります。これ等のことを考へ合せますれば「生活即念佛、念佛即生活」を以て信仰の第一義として居られたことが判るのであります。然しながらこゝまで信仰が進むことは容易ではありません。そこで助業の考へを以て生活を淨化するやうに努める方が萬人向きでありえます。から、かうした御法話もあつたことと存じます。

いづれにせよ。一切を念佛の中に攝めて信仰と生活とを一元化し、最も正しい信仰生活としたいものであります。

中村 辨康 著

新刊 信仰問答

賣價三圓十五錢
送料 廿四錢

「浄土」創刊以來連載の「信仰相談」から大切な問題ばかり約二百を選び、系統的に配列して一冊の書物とした。誰もが知りたい難問疑義に對して明解を與へた興味深い活きた信仰案内書である。それは問ふ者が切實な信仰上の悩み、疑ひをそのまゝぶちまけ答へる者が一々親身になつて懇切な指導をなしてゐるからである。従つて本書は最も平易な佛教讀本であり、また佛教辭典でもある。一讀して自づと信仰の指針が與へられる。

發行所

法然上人鑽仰會

東京都芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番

編輯後記

◇このところ次々と編輯したため大變御迷惑をおかけ致したにかゝらず、吉田絃二郎先生から早速玉稿を頂き、深謝してゐます。
◇佐藤春夫先生は歸朝後間のない御多用中を玉稿を下されました。先生は多少齒を痛められた外は半年前と少しも變らぬ元氣な姿で歸られました。私の身體は暑い所の方が適してゐます。恐らく南方から漂流してきた祖先の血があるのでせう。とか、南方各地で暑いと思つたのは四度しかないと申されました。「自動車の旅よりも飛行機の方が餘程疲れません。飛行機なら一切を機械と操縦士にまかせ切りであり、大空の方が地上より安全ですが、たとへ落ちたとしても皆が一緒に苦にもなりません。飛行機は他力の有難さでせう」とのことです。又デング熱にかゝつたことを近來有難いことだと申されてゐました。(村瀬)

浄土 七月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和九年六月二十日印刷納本
昭和九年七月一日發行

(定價十二錢)

東京都芝區芝公園十五號明照會館
編輯兼 眞野 正順
發行人

東京都芝區芝公園十五號明照會館
印刷人 赤尾 光雄

東京都牛込區市ヶ谷加賀町一ノ三
(東京二)

印刷所 大日本印刷株式會社
配給元

東京都神田區廣路町二ノ九
日本出版配給株式會社

發行所 法然上人鑽仰會
東京都芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番
會員番號二三〇〇〇七

「浄土」購讀規定

定價 金十二錢

(送料二錢)

會費 金一圓六十八錢
一ヶ年 (送料共)

振替納込みはすべて十錢増のこと

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可 (毎月一回一日發行)
昭和十九年六月廿日印刷納本・昭和十九年七月一日發行

浄土

第十卷 第七號

定價金十二錢(送料)